

2022年4月16日発行

事務所 武石地域総合センター内

TEL:0268-85-2511

<https://www.s-takeshi.jp>

印刷 中澤印刷株式会社



地区総出で綱撚り

4月10日に予定されていた子檀嶺神社御柱祭はコロナ感染が収まらないため、おねり行列は中止、御柱曳きも氏子や住民の参加は取りやめ、重機により行うこととなりました。

このため曳き綱も必要なくなりましたが、御柱の山出しでは前回の御柱の里曳きで使われた曳き綱を使用することが慣例ですので、次回の御柱山出しに使用するための曳き綱が必要です。曳き綱は、余里・小沢根で1本ずつ作ることであります。

3月13日(日)余里地区では駒形神社前の市道200mを使い、朝8時30分から総勢70名が出て曳き綱作りが行われました。

まず藁縄90本が100mほどの長さに伸ばされ、これに大勢の人が取りついて太さ5cmほどの荒縄3本に撚り上げます。次に2本の木を組んだ「仕掛け」にその荒縄3本を通し、「セーの」の掛け声とともに撚りあげ、半日をかけて長さ約80mの曳き綱が完成しました。

余里地区世帯数は50余り、人口減少と高齢化のため地区だけでは綱撚りができないと危ぶまれていましたが、転出した人や地区外に住む親戚などの応援も得て無事曳き綱づくりができました。

小沢根地区では秋に綱撚りを予定しています。またこの日は藪合地区で用意した大しめ縄も鳥居にかけられました。

武石八景案内看板設置除幕式 信廣寺晩鐘

誰が声を告るなるらん茜さす
陽も西山に入相の鐘
通孝

「ゴーン♪～ゴーン♪～」と早春の夕暮れ時、武石の里に信廣寺の鐘が今日も鳴り響く。

200年前、この地に住んでいた農民達は何を思ってこの鐘を聞いていたのだろうか。厳しい生活の中、一日の終わりに安堵していたのか。明日への思いを巡らすことができているのだろうか。

上田藩の命で武石村に入った郡奉行相馬と右衛門通孝は、村の役人と荒廃した村中を巡り、心に残った風景を「武石八景」として和歌に歌いました。住みよい武石をつくる会自然・生活環境部会では、武石八景として伝わっているか所に案内看板の設置を進めています。3月25日、信廣寺境



内に「信廣寺晩鐘」の歌碑の案内看板が設置され、信廣寺牛山住職、小池文男総代会長などの皆さんの立ち会いのもと、除幕式が行なわれました。つくる会児玉会長は「どのように荒廃した村を再建したか先人の熱い思いを後世に伝えて、鐘の音に当時に思いを馳せてもらいたい。」とあいさつしました。

昨年10月に設置した小沢根の「乱橋瀑布」に続く第2弾となるもので、つくる会では今年度は更に2か所に設置を計画しています。

“たまりや”を地域活性の拠点にしたい!! 風土つなぎ隊古民家再生プロジェクト

3月30日(水)七ヶの下武石信号脇の“たまりや”を50人ほどが視察しました。

“たまりや”は昭和30年代まで醤油の製造販売をしていましたが、廃業後作業棟は取り壊され母屋は空き家となっていました。武石の中心地でもあり、明治20年代の典型的な蚕室造りの建物でもあることから、何とか活用できないかを模索している武石風土つなぎ隊では、家の持ち主とも話し合ってきました。

この日はつくる会も協賛して、総合センターホールにおいて、湯田中温泉や長野市・小布施町でレストランなど地域活性化に携わってきた君島登茂樹さんと建築家の香川翔勲さんから古民家再生に関してお話をいただく学習会を行うとともに、現場を見ていただきながら活用についてのアドバイスを受けました。



たまりや

風土つなぎ隊では古民家再生プロジェクトとして、武石の食材を利用したカフェ・レストランや若者が集えるネットの充実、四季折々の地域の魅力発信等の場として活用できないかを検討していきたいとしています。

風土つなぎ隊からのお知らせ

つなぐ家 主催 風土つなぎ隊

ハートフルガーデン 春マルシェ

2022. 4.29 祝日
10:00~15:00
会場 柳沢ソロバン教室広場周辺

☆ピロ・タッキー ☆雑話術ショー ☆11:00~

☆コスプレ親父のモノマネライブ ☆13:00~

☆Mr.potato バルーンアートショー ☆11:40@13:40

☆各種お楽しみマルシェ
☆レコードまつなが♡今日は一日Jazz+
☆ピザ窯を使用した焼きたマピザ※ピザはつなぐ家にマ
☆もったいない市 ☆もんマーケット
☆緑が輪・ふれあいカフェ武石

後援 上田市商工会武石支部 お問い合わせTEL 090-5790-4508 (柳沢)

雲溪荘の在り方について

武石地域協議会(池内俊郎協議会長)は、令和4年度以降の雲溪荘の在り方について3月17日(木)市長に意見書を提出しました。武石地域の重要課題として数年にわたり検討を重ねてきたものです。雲溪荘は、

- ① 築後46年経過と耐用年数に近く、老朽化が進んでいる。
- ② 土砂災害の危険区域に立地している。
- ③ 毎年数千万円の収支の赤字が続き、さらに最近ではコロナの影響もあり利用者が激減している。

等の問題を抱えています。意見書では、3年をめぐりに、

- ① うつくしの湯も給湯配管が老朽化している問題を抱えているため、両施設を統合した新施設を建設したらどうか。
- ② ①が困難な時は、雲溪荘は廃止し、入浴のみ的小規模施設を設置するか、うつくしの湯に事業



- を引き継ぐ。
 - ③ ②も困難なときは雲溪荘は廃止し、源泉の保全と温泉販売等の温泉活用の会社組織を設置する。
 - ④ 財源については、過疎債を活用する。
- 等を提言しています。

地域協議会では、昨年度市が行った住民アンケートを参考に協議・検討してきましたが、アンケート回収率は30%程度と低く、住民の関心は決して高いとはいえません状況です。

過疎地域発展計画策定に伴う意見交換会

武石地域は4月1日から、合併時の旧市町村単位で指定される「一部過疎」地域として指定され



ました。これを受けて、市では6月ごろまでに地域の意見を集約し、県との協議を経て9月の市議会において過疎地域自立促進計画を議決し、国の認可を得たいとしています。

3月15日(火)につくる会との懇談がもたれ、武石地域が過疎地域に指定された経過や過疎対策事業債の概要等について説明がありました。

過疎対策事業債は、産業振興、交通通信、生活環境、福祉・医療・教育文化、集落再編、自然エネルギーなどのハード事業と、住民の安全な暮らしの確保のためのソフト事業が対象とされ、つくる会では自治センターの素案をもとに運営委員会や部会で検討していきます。

過疎対策事業債は、今後最低9年間は指定が継続されるものと見込まれています。

下本入の桜堤防

下本入の茂沢川右岸に住民の皆さんが植えた50本ほどの桜が、例年4月中旬に満開になります。下本入里山組合(芹沢勉代表)が25年ほど前にアカシア等を伐採・整地して植え、年3回の草刈りや鹿害防止の囲いなどの手入れを続けてきたものです。

写真は昨年4月24日ですが、SNSなどで情報が広がり、この日は茅野市から訪れたグループが日陰でお茶を楽しんでいました。桜とかなたの浅



間山が見事です。

今年も市の武石全域公園化事業の補助を受け苗木30本を植えるとのこと。

自治会活動の活性化について

上田市自治会連合会では、2019年から20年度にかけて、自治会活動のあり方について専門委員会を設け、昨年2月に「自治会活性化に向けて」と題するレポートを発表しました。委員会は上田、丸子、真田、武石4地域の各地区連役員代表等で構成され、委員長は大布施自治会長だった浦部秀幸さんが2年間にわたり務め、取りまとめに尽力されました。

自治会は地縁的に結びついた、地域住民福祉の向上やコミュニティの場として欠かせないものであり、また行政との協働による住民サービスの向上を担っています。しかし近年は産業構造や生活様式の変化の中でその在り方が問われるようになってきています。このレポートは自治会が抱える問題点を洗い出し、今後の自治会活動を進めるうえの方向のヒントが示されていますので要旨を紹介します。

「自治会活性化に向けて」レポート要旨

1 自治会の役割

自治会は多くの住民にとって、普段意識することはないものの、地域で安全・安心・快適な暮らしを保つうえで必要不可欠な組織であり、以下のような役割を担っている。

- ① 地域住民の相互交流・親睦の場の提供
- ② 地震・台風・大雪など災害時の互助、共助
- ③ 犯罪・事故の未然防止と環境美化
- ④ 文化・伝統行事の継承や地域の連帯意識の醸成
- ⑤ 行政等との連絡調整窓口 等々

2 自治会の課題

多くの自治会が以下のような課題に直面し、自治会の機能低下や活力衰退を招く要因となっている。

- ① 会員数が減少傾向にある（関心の希薄、人づき合いが煩わしい、自治会費やお天馬などが重荷であるなどの理由）
- ② 役員のなり手がいない、不足している
- ③ 会員の高齢化が進んでいる
- ④ 自治会活動や伝統行事の担い手不足、参加者の減少などがあり、自治会活動のネックになっている。
- ⑤ 新住民自治組織（住みよい武石をつくる会）との機能・役割分担のあいまいさ

3 課題を解決するために

自治会が抱える課題を改善するための具体的方策としては

- ① 新規加入者を増やす（加入促進パンフレットを活用した転入者への働きかけ等）
- ② 自治会運営マニュアルの作成や役員経験者による新役員のサポート体制をつくる
- ③ 自治会長の負担軽減（自治会長担当業務の再検討、役員間での再配分）
- ④ 女性や各世代の会員が参加しやすいシステムや取り組み
- ⑤ 高齢者の戦力化
- ⑥ 自治会長等役員の任期の複数年化を検討（限りある人財の有効活用）
- ⑦ 自治会のスリム化（業務・活動を見直し、縮小や統廃合を図る）
- ⑧ 財政運営の透明化、見える化を図る（予算、決算説明にグラフを活用するなど）
- ⑨ 地区連の在り方を行政主導・依存から見直す

などが提案されています。

人口減少や少子高齢化が進む中で、地域で助け合い住みやすい環境作りを進める上で、持続可能な自治会であり続けるために、自治会の在り方を再考すべき時期ではないでしょうか。なお本レポートは2021年度各自治会長に配布されていますので、関心のある方はご覧ください。

浦部さんのコメント

本レポートは市内241自治会に共通する課題に絞り、課題解決のための手引き書、ヒント集として取りまとめたものです。今後、各自治会でのあり方や活性化等を検討する際の参考になれば幸いです。



御柱祭りすけと助ねり

郷土史家 児玉卓文

御柱祭りのお練りの奉納ができなくなったのは残念ですが、昔のお練りの様子を見ておきましょう。

『武石村誌』(平成元年)の民俗編には、江戸時代末以降武石の御柱祭りは派手になり、近郷近在から「助ねり」と呼ぶ応援があったことが記録されています。

江戸末から明治には、河原に仮設舞台を設け歌舞伎が上演されました。冬場に師匠の家で稽古を積んで、権現の綺羅(歌舞伎衣装)屋さんから衣装を借り、幾つかのグループが競演したようです。

明治中頃、七ヶ・藪合・片羽・市ノ瀬集落は太鼓・鼓・笛・三味線の楽器による屋台囃子を出しました。これは芸能に堪能な八重原の宮下さんから習いましたが、前の三集落は道具を火災で亡くしたため、市ノ瀬集落のものだけが残ったようです。

長和町の有坂からは三頭獅子みつがしらししの舞が奉納されましたが、他村から奉納される「寄進ねり」には、寄進宿を提供するお宅がありました。

有坂は諏訪社ですが、民俗研究者の箱山貴太郎さんは、上田小県地域の諏訪社には三頭獅子の舞が多く伝わり、武石の大宮諏訪社にもあったと記録しています(『信濃』昭和24年)。

『上田小県誌 第五巻』(昭和48年)は、民俗研究者の田口光一さんが、七ヶ・藪合・片羽・市ノ瀬集落の子供歌舞伎を記録しています。

それによれば、「それぞれ大八車を合わせた地車を組み立てた屋台を作り、二段に構えられた上段踊り場には3尺(90cm)くらいの袖そでをつけ、下屋との間に簾すだれをかけて、周囲は舟形の枠で囲んで紅白の幕を下げ、村中で桜・牡丹・菊の造花を作り屋台を飾った。内部の下段には若い衆はやしが囃し方、上で踊る踊り手は全て子供で、祢津から半兵衛師匠を招いて、かなり手抜きした内容で師匠が義太夫を語り指導した。演目は二十四孝、義経千本桜、安達三、太閤記十段目などで、お練りの進行中であとまつ踊り、橋へ下るところで屋台を止めて一幕踊り、河原の広場で三幕踊った。後祭りとし

て、市ノ瀬では翌日の午後、金子豊さんの庭に屋台を引き込んで、客の接待で当日見られなかった女衆のために踊った」とあります。

さらに、「子供歌舞伎は大正初期に若者歌舞伎に切り替えられ、大正末には地芝居も打ち切られ、その後は旅回りの芝居が小屋掛け有料で行われた」とされています。

東御市の文書館に、木偶頭でくがしらを含む衣装・小道具など古い人形芝居の道具が展示されています。「人形忠」の焼き印のある頭が2体あり、阿波の人形浄瑠璃にんぎょうじょうるり(国指定重要文化財)と同類で注目されています。これは新張にはりの柳沢さんが所持していたもので、何代か前に和村から手に入れたとのこと。

阿波の人形浄瑠璃は、舞台上で演じられる文楽ぶんらくと異なり、神社の境内など仮設の舞台で行われ



るのを特徴とするようです。新張の人形は冬期間、村内ばかりでなく上田などの近在、遠くは嬬恋まで出かけ、大きな家の座敷に舞台をしつらえて演じたとのことですが、武石村の御柱祭りでは河原に舞台を作って演じたと伝えています。



人形芝居の衣装と小道具

武石を盛り上げる
人々グループ紹介

武石の人々 団体

木工家 芦田 貞晴さん
造形家 櫻井 三雪さん

上 本入と下本入の境あたり、権現原の木立に囲まれた場所に工房と住まいがあります。もとは別荘だったという敷地にたくさん植えられていた針葉樹を、広葉樹に思い入れがあった二人は自分たちで伐採して、冬には室内に陽が入る広葉樹の庭に少しずつ作り変え、今では自然の雑木林のような景色が広がっています。

木の家具と暮らしの道具を作る芦田さんは岡山県出身で、職業訓練校で木工を1年間学んだ後、小諸市の木工家・谷進一郎さんのもとの9年間木工修業をして独立、作品作り専念できる場所を求め、2001年に武石に工房を開設しました。

工房に入ると、壁一面には作業用の道具が並んでいて、大型の木工機械といろいろな種類の木材が所狭しと置かれていました。大小さまざまな木材の中には、リンゴ・ウメ・カキ・・・などストーブ用の薪の中から選んだものもあるということで、美しい色や木目の木が出番を待っています。

「作るものに合わせて適切な材料を選ぶのが基本ですが、材料を生かせる用途を考えて作ることもあります。“作風”“らしさ”ということは考えずに、自由に作りたいたいと思っています。“こだわり”は持たないようになりたいというのが私のこだわりです」と芦田さんは笑っていました。

仕事は注文と創作が半々ぐらいとの事で、テーブルや椅子、棚、小さい現代風な仏壇など家具の他、箸、スプーン、器、花器、などの生活実用品も木で作れるものなら何でも作っているそうです。

「暮らしの中で身近に木の物を使ってほしい。手触り、口当たり、器に当たる感じなど新たな発見があり、生活が変わるきっかけになるのではないかと木製品の魅力を話してくれました。



櫻井さんは旧丸子町で生まれ育ち、子供の時からものづくりが好きで、技術専門校で木工と木彫の基礎を学びました。その後、自然からイメージを受けて立体作品の制作を始め、美しい木の端材を利用したアクセサリーも制作しているそうです。

「武石に住みだして、秋には牡鹿の声を聴き、春の訪れを野鳥の音が知らせてくれます。季節ごとの草木が茂りそして枯れていく。自然の変化が手に取るように感じられ、作品制作の糧になっています」と櫻井さんは話していました。



芦田貞晴「桜円柱厨子」



櫻井三雪「うつろい」

展示会がありますので、一点一点表情の違う木工品に出会う機会を作ってはいかがでしょうか。
(芦田さんが参加するグループ展と二人展)

- 「木工家の仏壇と祈りのかたち展」
4/21(木)～5/6(金) 長野市 ガレリア表参道
- 「上田工芸展」
5/19(木)～5/23(月) 上田市 サントミュージゼ
- 「工房家具 種」
8/4(木)～8/8(月) 軽井沢町追分 油や
- 「東信濃工芸作家展」
9/10(土)～10/16(日)
東御市 梅野記念絵画館・ふれあい館
- 「芦田貞晴・櫻井三雪 二人展」
10/22(土)～11/13(日) 鹿教湯温泉 三水館

